

表現者・堀口捨己—総合芸術の探求—

正会員 藤岡洋保君

日本近代建築史研究は近年、多くの成果が蓄積されている分野である。近代の建築は設計者の「作品」として提示されることが常態となる。受容する側の関心も、建築物それ自体以上に、その設計者＝「建築家」に注がれる。にもかかわらず建築家個人に焦点を当てて「創作の秘密」をさぐろうとする研究は必ずしも多くない。その状況は、欧米の建築家たちが、重要な業績を残した人物であれば、たいいてい評伝を編まれていることと対照的である。

そうしたなか、本論文は、建築家・堀口捨己の思想と作品を徹底的に分析した成果として刊行された。研究対象たる堀口捨己は、日本の近代主義建築の先導者であり、かつ茶室・数寄屋研究者として不朽の業績を残した人物である。受賞者は堀口捨己の活動の総体を「表現」と捉えて、それぞれの内実を明確にするとともに、それら相互の連関を見定めようとする。その叙述はおおよそ時間軸に沿って4章をもって組み立てられる。第1章は生いたちから1920年以降の分離派建築会運動、1930年竣工の吉川邸までのいわば初期堀口の活動が論じられる。第2章では、1930年代における堀口捨己の建築思想の形成を分析する。「日本的なもの」に対する論考と茶の湯・茶室研究を詳細に読みほぐし、同時に岡田邸など戦前の代表作3作について具体的様態を分析することで、近代主義のフィルターを通した伝統理解の様相を解明している。第3章では、戦後作品の考察、作品集・著書の構成の分析から、堀口の表現の志向性を抽出する。第4章では、ここまでの叙述を踏まえて、近代日本という枠組みにおける堀口捨己の思想と表現の特質を述べる。

堀口捨己は稀代の文章家であり、自らの創作・研究に関して、数多くの、そして影響力に富んだ言説を残した。いったいに建築家研究において、言説と作品・行動とのズレには悩まされるところであるが、受賞者は、むしろ言説と作品のあいだの「緊張感やせめぎあい」に注目して、そこに堀口捨己の特徴と歴史的位置をさぐろうとしている。堀口捨己における言説と作品の整合が実は戦略的なレトリックであり、そこに彼の表現の要諦を見ようとするのである。これは、建築家研究の困難さを逆手に取った卓抜な視点であり、この方法論意識の貫徹こそ、本論文の第一の美点である。なお、付言するならば、建築家の言動が戦略的であることを指摘する論考は、神話破壊的なニュアンスを帯びるのが常で、批判的態度によって客観性を担保しようとしがちだ。そこにあつて受賞者は分析対象たる堀口捨己に終始敬意を忘れない。そのことが結果的には、叙述に適切な真率さをもたらしている。

この方法論の意識化とともに本論文の画期的な点は、新資料博搜の成果である。分散して伝来している堀口資料の整理校訂にはじまり、作品の土地登記簿まで追跡する徹底した調査によって、個々の作品が成立する経緯を鮮やかに浮かび上がらせ、建築家の活動の全体像を堅固に構築することに成功している。

受賞者は一貫して近代日本の建築的思考のありように目を注いできた。本論文は、長年の蓄積を存分に生かして、建築思潮史を思考の歴史的構造の解明という水準に押し上げようとする意欲的な業績として高く評価できる。よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。